

源氏物語

竹河

紫式部

青空文庫

私たちは常少女とこをとめにて春ごとに花あらそひ

をくり返せかし

(晶子)

ここに書くのは源氏の君一族とも離れた、最近に亡なくなった関白太政大臣の家の話である。つまりぬ女房の生き残ったのが語って聞かせたのを書くのであるから、紫の筆の跡には遠いものになるであろう。またそうした女たちの一人が、光源氏の子孫と言われる人の中に、正当の子孫と、そうでないのがあるように思われるのは、自分などよりもっと記憶の不確かな老人が語り伝えて来たことで、間違いがあるのではないかと不思議がつて言ったこともあるのであるから、今書いていくことも皆真実のことではなかったかもしれないのである。

玉たま鬘かづらの尚ない侍しのかみ

の生んだ故人の関白の子は男三人と女二人であつたが、どの子の未来も幸福にさせたい、どんなふうにと空想を大臣は描いて、成長するのをもどかしいほどに思っているうちに、突然亡くなったので、遺族は夢のような気がして、大臣の志していた姫君を宮中へ入れることもそのままに捨てておくよりしかたがなかった。

世間の人は目の前の勢いにばかり寄つてゆくものであったから、強大な権力をふるつていた関白のあとも、財産、領地などは少なくならないが、出入りする人が見る見る減つて、寂しく静かな家になった。玉鬘夫人の兄弟たちは広く榮えているのであるが、貴族たちの肉親どうしの愛は一般人よりもかえつて薄いもので、大臣の生きている間さえもそう親密に往来をしなかった上に、大臣が少し思いやりのない、むら気な性質で恨みを買うこともしたためにか、遺族の力になろうとする人も格別ないのであった。六条院は初めと変わらず子の一人として尚侍を見ておいでになつて、御遺言状の遺産の分配をお書きになつたものにも、冷泉院の中宮の次へ尚侍をお加えになつたために、夕霧の右大臣などはかえつて兄弟の情をこの夫人に持つていて、何かの場合には援助することも忘れなかった。男の子たちは元服などとして、それぞれ一人並みになつていたから、父の勢力に引かれておれば思うようにゆくとところがゆかぬもどかしさはあるといつても、自然に放任しておいても年々に出世はできるはずであつた。姫君たちをどうさせればよいことかと尚侍は煩悶しているのである。帝にも宮仕えを深く希望することを大臣は申し上げてあつたので、もう妙齡に達したはずであると、年月をお数えになつて入内の御催促が絶えずあるのであるが、中宮お一人にますます寵が集まつて、他の後宮たちのみじめである中へ、おくれ

て上がって行つてねたまれることも苦しいことであらうと思われるし、また存在のわからぬ哀れな後宮に娘のなっていることも親として見るに堪えられないことであるからと思つて、尚侍はお請けをするのに躊躇ちゆうちよされるのであつた。冷泉院いんぜんから御懇切にやうに女御として院参いんぜんをさせるようにとお望みになつて、昔尚侍がお志を無視して大臣へ嫁とついでしたことまでもまた恨めしげに仰せられて、

今ではいつそう年もとり、光の淡うすい身の上になつていて取柄とりえはないでしょうが、安心のできる親代わりとして私にください。

お手紙にはこんなふうなお言葉もあるのであつたから、これはどうであらう、自分が前生の宿縁で結婚をしたあとでお目にかかったのを飽きたらず思召おぼしめしたことが、恥はづかしくもつたいいことだったのであるから、お詫わびに代えようかなだとも思つて、なお尚侍は迷つていた。美人であるという評判があつて恋をする人たちも多かつた。右大臣家の蔵くら人少将ろうととか言われている子息は、三条の夫人の子で、近い兄たちよりも先に役も進み大事がられている子で、性質も善良なできのよい人が熱心な求婚者になつていた。父母のどちらから言つても近い間柄であつたから、右大臣家の息子むすこたちの遊びに来る時はあまり隔てのない取り扱いをこの家ではしているのであつて、女房たちにも懇意な者ができ、意志

を通じるのに便宜があるところから、夜昼この家に来ていて、うるさい気もしながら心苦しい求婚者とは尚侍も見ていた。母の雲井くもいの雁夫人かりからもそのことについての手紙も始終寄せられていた。

まだ軽い身分ですが、しかもお許しくださる御好意を、あるいはお持ちくださることかと思われます。

と夕霧の大臣からも言つてよこされた。玉鬘たまかざら夫人は上の姫君をただの男とは決して

結婚させまいと思つていた。次の姫君はもう少し少将の官位が進んだのなら与えてもさしつかえがないかもしれぬと思つていた。少将は許しがなければ盗み取ろうとするまでに深い執着を持つているのである。もつてのほかの縁と玉鬘夫人は思つていのではないが、女のほうで同意をせぬうちに暴力で結婚が遂行されることは、世間へ聞こえた時、こちらにも隙すきのあつたことになってよろしくないと思つて、蔵人少将の取り次ぎをする女房に、「決して過失をあなたたちから起こしてはなりませんよ」

といましめていたので、その女も恐れて手の出しようがないのである。

六条院が晩年に朱雀院すしづくの姫宮にお生ませになつた若君で、冷泉院が御子のように大事にあそばす四位の侍従は、そのころ十四、五で、まだ小さく、幼いはずであるが、年齢より

も大人びて感じのよい若公達わかきんだちになつていて、将来の有望なことが今から思われる風貌ふうぼうの備わつた人であるのを、尚侍は媚にしてみたいように思つていた。この邸やしきは女三にょさんの尼あまみや宮の三条のお邸に近かつたから、源侍従は何かの時にはよくこの子息たちに誘われて遊びにも来るのであつた。妙齡の女性のいる家であるから、出入りする若い男で、自身をよく見られたいと願わぬ人はないのであるが、容貌の美しいのは始終来る藏人少将、感じのよい貴人らしい艶えんな姿のあることはこの四位の侍従に超こえた人もなかつた。六条院の御子という思いなしがしからしめるのか、源侍従はほかから特別なすぐれた存在として扱われている人である。若い女房たちはことさら大騒ぎしてこの人をほめたたえるのであつた。尚侍も、

「人が言うとおりだね、実際すばらしい公達ね」

などと言つていて、自身が出て親しく話などもするのであつた。

「院の御親切を思うと、お別れしてしまったことが、ひどい損失のような気がして、悲しくばかりなる私が、お形見と思つてお顔を見ることができる方でも、右大臣はあまりにごりつばな御身分で、何かの機会でもなければお逢あいすることもできないのだから」

と言つていて、尚侍は源侍従を弟と思つて親しみを持っているのであつたから、その人

も近い親戚しんせきの家としてここへ出てくるのである。若い人に共通した浮わつたことも言わず、落ち着いたふうを見せていることで、二人の姫君付きの女房は皆物足らぬように思つて、いどみかかるふうな冗談じょうだんもよく言いかけるのだつた。

正月の元日に尚侍ないしのかみの弟の大納言、子供の時に父といつしよに来て、二条の院で高砂たかさを歌つた人であるその人、藤中納言とうちゅう、これは真木柱まきばしらの君と同じ母から生まれた関白の長子、などが賀を述べに来た。右大臣も子息を六人ともつれて出てきた。容貌を初めてしてまた並ぶ人なきりつばな大官と見えた。子息たちもそれぞれきれいで、年齢の割合からいつて、皆官位が進んでいた。物思いなどは少しも知らずにいるであろうと見えた。いつものように蔵人少将はことに秘藏息子むすこらしくその中でも見えたが、氣の浮かぬふうが見え、恋をしている男らしく思われた。

大臣は几帳きちようだけを隔てにして、尚侍と昔に変わらぬふうで語るのであつた。

「用のない時にも伺わなければならないのを、失礼ばかりしています。年がいつてしまひまして、御所へまいる以外の外出がもういつさいおつくに思われるものですから、昔の話を伺いたい気持ちになります時も、そのままに済ませてしまうようになるのを遺憾に思います。若い息子たちは何の御用にでもお使いください。誠意を認めていただくようにす

るがいいと教えております」

「もうこの家などはだれの念頭にも置いていただけないものになっておりますのに、お忘れになりませんで御親切にお訪ね^{たず}くださいましたのをうれしく存じますにつけても、院の御厚志が私を今になっても幸福にしてくださいさるのだとかたじけなく思うのでございます」

尚侍はこんなことを言つたついでに、冷泉院からあつた仰せについて大臣へ相談をかけた。

「しかとした後援者を持ちませんものが、そうした所へ出てまいっては、かえつて苦しみますばかりかとも思われますが」

「宮中からもお話があるということですが、どちらへおきめになつていいことでしょうか。院は御位^{みくらい}をお去りになりまして、盛りの御時代は過ぎたように、ちよつと考えるは思ふでしょうが、たぐいもない御美貌^{びぼう}でいらつしやるのですから、まだお若々しくて、りっぱに育つた娘があれば、差し上げたいという氣に私もなるのですが、すぐれた後宮がおりになるのですから、その中へはいらせてよいような娘は私になくて、いつも残念に思われるのです。いったい女^{にょいち}一の宮^{みや}の女御は同意されているのですか。これまでもよく人がそ

ちらへの御遠慮から院参を断念したりするのでしたが」

と大臣は質^{ただ}した。

「女御さんから、つれづれで退屈な時間もあなたに代わってその人の世話をしてあげることで紛らしたいなどとお勧めになるものですから、私も院参を問題として考えるようになったのでございます」

と尚侍は言っていた。あとからも来た高官たちはここでいっしょになって三条の宮へ参賀をするのであった。朱雀院^{すざく}の御恩顧を受けた人たちとか、六条院に近づいていた人たちとかは今も入道の宮へ時おりの敬意を表しにまいることを怠らないのであった。この家の左近中将、右中弁、侍従なども大臣の供をして出て行った。大臣の率いて行く人数にも勢力の強大さが思われた。

夕方になって源侍従^{かおる}の薫^かがこの家へ来た。昼間玉鬘^{たまかづら}夫人の前へ現われたこの人よりもやや年長の公達^{きんだち}も、それぞれの特色が備わっていて悪いところもなく皆きれいであったが、あとに来たこの人にはそれらを越えた美があつて、だれの目も引きつけられるのであった。美しい物好きな若い女房たちなどは、

「やっぱり違つておいでになる」

などと言った。

「こちらのお姫様にはこの方を並べてみないでは」

こんなことを聞きにくいまでに言つてほめる。そう騒がれるのにたるほどの優雅な举止を源侍従は見せていて、身から放つ香も清かった。貴族の姫君といわれるような人でも頭のよい人はこの人をすぐれた人と言うのはもつともなことだとくらい認めるかと思われた。尚侍は念誦堂ねんずどうにいたのであつたが、

「こちらへ」

と言わせるので、東の階きぎはしから上がつて、妻戸の口の御簾みすの前へ薫はすわった。前になつた庭の若木の梅が、まだ開かぬ蕾つぼみを並べていて、鶯うぐいすの初声はつねもとのわぬ背景を負つたこの人は、恋愛に関した戯れでも言わせたような美しい男であつたから、女房たちはいろいろな話をしかけるのであるが、静かに言葉少なな応対だけより侍従がしないのをくやしがつて、宰相の君という高級の女房が歌を詠よみかけた。

折りて見ばいとど匂におひもまさるやと少し色めけ梅の初花

速く歌のできたことを薫は感心しながら、

「よそにてはもぎぎ挽木なりとや定むらん下に匂へる梅の初花

疑わしくお思いになるなら袖をそで触れてごらんさい」

などと言っていると、また女房は、

「ほんとう眞実は色よりも香」

口々にこんなことを言つて、引き揺らんばかりに騒いでいるのを、奥のほうからいぎつて出た玉鬘夫人が見て、

「困つた人、あなたたちは。きまじめな人をつかまえて恥ずかしい気もしないのかね」

とそつと言つていた。きまじめな人にしてしまわれた、あわれむべき名だと源侍従は思つた。この家の侍従はまだ殿上の勤めもしていないので、参賀する所も少なくて早く家に歸つて来てここへ出て来た。せんこう浅香の木の折敷二つに菓子と杯を載せて御簾から出された。

「右大臣はお年がゆけばゆくほど院によくお似ましになるが、侍従はお似になったところはお顔にないが、様子にしめやかなえん艶なところがあつて、院のお若盛りがそうでおありに

なつたであらうと想像されます」

などと薫の帰つたあとで尚侍は言つて、昔をなつかしくばかり追想していた。あたりに残つたかんばしい香までも女房たちはほめ合つていた。

源侍従はきまじめ男と言われたことを残念がつて、二十日過ぎの梅の盛りになつたころ、恋愛を解しない、一味の欠けた人のように言われる不名誉を清算させようと思つて、藤侍従を訪問に行つた。中門をはいつて行くと、そこには自身と同じ直衣姿の人が立つていた。隠れようとその人がするのを引きとめて見ると蔵人少将であつた。寢殿の西座敷のほうで琵琶と十三絃の音がするために、夢中になつて立ち聞きをしていたらしい。苦しうだ、人が至当と認めぬ望みを持つことは仏の道から言つても罪作りなことになるであらうと薫は思つた。琴の音がやんだので、

「さあ案内をしてください。私にはよく勝手がわかつていないから」

と言つて、蔵人少将とつれだつて西の渡殿わたしのの前の紅梅の木の前を歩きながら、催馬楽いづれの「梅が枝」を歌つて行く時に、薫の侍従から放散する香は梅の花の香以上にさつと内へおつてはいつたために、家の人は妻戸を押しあけて和琴を歌に合せて弾きだした。呂りよの声の歌に対しては女の琴では合わせうるものでないのに、自信のある弾き手だと思つ

た薫は、少将といつしよにもう一度「梅が枝」を繰り返した。琵琶も非常にはなやかな音だった。まったく芸術的な家であるとおもしろくなつた薫は、元日とは変わった打ち解けたふうになつて、冗談じょうだんなども今夜は言つた。

御簾みすの中から和琴を差し出されたが、二人の公達きんたちは譲り合つて手を触れないでいると、

夫人は末の子の侍従を使いにして、

「あなたのは昔の太政大臣の爪つま音おとによく以ているということですから、ぜひお聞きしたいと思つてゐるのです。今夜は鶯うぐいすに誘われたことにしてお弾きくだすつてもいいでしょう」

と言わせた。恥ずかしがつて引つ込んでしまうほどのことでもないと思つて、たいして熱心にもならず薫の弾きだした琴の音は、音波の遠く広がってゆくはなやかな気のされるものだった。接近することの少なかつた親ではあるが、亡なくなつたと思うと心細くてならぬ尚ないしのかみ侍が、和琴に追慕の心を誘われて身にしむ思いをしていた。

「この人は不思議なほど亡くなつた大納言によく似ておいでになつて、琴の音などはそのままのような気がされました」

と言つて、尚侍の泣くのも年のいったせいかもしれない。少将もよい声で「さき草」を歌つた。批評家などがないために、皆興に乗じていろいろな曲を次々に弾き、歌も多く

歌われた。この家の侍従は父のほうに似たのか音楽などは不得意で、友人に杯をすすめる役ばかりしているのを、友から、

「君も勸杯の辞にだけでも何かをするものだよ」

と言われて、「竹河^{たけかわ}」をいっしよに歌ったが、まだ少年らしい声ではあるがおもしろく聞こえた。御簾^{みす}の中からまた杯が出された。

「あまり酔つては、平生心に抑制していることまでも言ってしまうということですよ。その時はどうなさいますか」

などと言つて、薫の侍従は杯を容易に受けない。小桂^{こうちぎ}を下に重ねた細長のなつかしい薫香^{たきもの}のにおいの染^しんだのを、この場のにわか^{てんとう}の纏頭^{てんとう}に尚侍は出したのであるが、

「どうしたからいただくのだからわからない」

と言つて、薫はこの家の藤侍従の肩へそれを載せかけて帰ろうとした。引きとめて渡そうとしたのを、

「ちよつとおじやまするつもりでいておそくなりましたよ」

とだけ言つて逃げて行つた。

蔵人少将はこの源侍従が意味ありげに訪問した今夜のようなことが続けば、だれも皆好

意をその人にばかり持つようになるであろう、自分はいよいよみじめなものになると悲観
していて、御簾みすの中の人へ恨めしがするようなこともあとに残って言っていた。

人は皆花に心に移すらん一人ぞ惑ふ春の夜の闇やみ

こう言つて、歎息たんそくしながら帰ろうとしている少将に、御簾の中の人が、

折からや哀れも知らん梅の花ただかばかりに移りしもせじ

と返歌をした。

翌朝になつて源侍従から藤侍従の所へ、

昨夜は失礼をして帰りましたが皆さんのお気持ちが悪くしなかったかと心配していま
す。

と、婦人たちにも見せてほしいらしく仮名がちに書いて、端に、

竹河たけかはのはしうちいでしひとふし一節に深き心の底は知りきや

という歌もある手紙を送つて来た。すぐに寢殿へこの手紙を持って行かれて、侍従の母夫人や兄弟たちもいっしょに見た。

「字も上手だね。まあどうして今からこんなに何もかもととのった人なのだろう。小さいうちに院とお別れになつて、お母様の宮様が甘やかすばかりにしてお育てになつた方だけれど、光つた将来が今から見える人になつていらつしやる」

などと尚侍は言つて、自分の息子たちの字の拙つたなさをたしなめたりした。藤侍従の返事は實際幼稚な字で書かれた。

昨夜はあまり早くお帰りになつたことで皆何とか言つてました。

竹河によを更ふかさじと急ぎしもいかなる節ふしを思ひおかまし

この時以来薫は藤侍従の部屋へやへよく来ることになつて、姫君への憧憬あこがれを常に伝えさせるのであつた。少将が想像したとおりに、家の者は皆この人をひいきにすることになつた。

まだ少年らしい弟の侍従も、この人を姉の婿にして、同じ家の中で睦み合いたいと願っていた。

三月になつて、咲く桜、散る桜が混じつて春の気分の高潮に達したころ、閑散な家では退屈さに婦人たちさえ端近く出て、庭の景色ばかりがながめまわされるのであつた。玉鬘夫人の姫君たちはちようど十八、九くらいであつて、容貌にも性質にもとりどりな美しさがあつた。姫君のほうは鮮明に気高い美貌で、はなやかな感じのする人である。普通の人の妻にはふさわしくないと母君が高く評価しているのもともに思われるのである。桜の色の細長に、山吹などという時節に合つた色を幾つか下にして重なつた裾に至るまで、どこからも愛嬌がこぼれ落ちるように見えた。身のとりなしにも貴女らしい品のよさが添っている。もう一人の姫君はまた薄紅梅の上着にうつりのよいたくさんな黒々とした髪を持つていた。柳の糸のように掛かっているのである。背が高くて、艶に澄み切つた清楚な感じのする聡明らしい顔ではあるが、はなやかな美は全然姉君一人のもののように女房たちも認めていた。暮を打つために姉妹は今向き合つていた。髪は質のよさ、鬘の毛の顔への掛かりぐあいなど両姫君とも共通してみごとなものであつた。侍従が審査役になつて、姫君たちのそばについているのを兄たちがのぞいて、

「侍従はすばらしくなったね。碁の審査役にさせていただけるのだからね」

と、大人らしくからかいながら、几帳きちょうのすぐそばにすわってしまおうと、女房たちは急に居ずまいを直したりした。上の兄の中将が、

「公務で忙しくしているうちに、姫君の愛顧を侍従に独占されてしまったのはつまらないね」

と言うと、次の兄の右中弁が、

「弁官はまた特別に御用が多いから、忠誠ぶりを見ていただけないからといっても、少しは斟しん酌しゃくしていただかないでは」

と言う。兄たちの言う冗じょう談だんに困って碁を打ちさして恥じらっている姫君たちは美しかった。

「御所の中を歩いていても、お父様がおいでになったらと思うことが多い」

などと言って、中將は涙ぐんで妹たちを見ていた。もう二十七、八であつたから風采ふうさいもりつぱになつていて、妹たちを父の望んでいたようにはなやかな後宮の人として見たく思っているのである。庭の花の木の中でもことに美しい桜の枝を折らせて、姫君たちが、

「この花が一番いいのね」

などと言つて楽しんでゐるのを見て、中將が、

「あなたがたが子供の時に、この桜の木を私のだ私のだど取り合ひをした時に、お父様は姉さんのものだとおきめになつて、お母様は小さい人のだとおきめになつたから、泣く騒ぎまではしなかつたけれど、双方とも不満足な顔をしたことを覚えていますか」

こんなことを言いだして、また、

「この桜が古い木になつたことでも、過ぎ去つた歲月が数えられて、力になつていただけたどの方にもどの方にも死に別れてしまつた不幸な自分のことが思われる」

とも言つて、泣きもし、笑いもしながら平生ほど時間のたつのを気にせずに中將は母の家にいた。他家の婿になつていて、こちらへ来て静かに暮らす余裕のある日などを持たないのであるが、今日は花に心が惹かれて落ち着いてるのである。尚侍はまだこうした人々を子にして持つてゐるほどの年になっているとは見えぬほど今日も若々しくて、盛りの美貌とさえ思われた。冷泉院の帝は姫君を御懇望になつてゐるが眞実はやはり昔の尚侍を恋しく思われになるのであつて、何かによつて交渉の起る機会がないかとお考えになつた末、姫君のことを熱心にお申し入れになつたのである。院參の問題はこの子息たちが反対した。

「どうしても見ばえのせぬことをするように思われますよ。現在の勢力のある所へ人が寄って行くのも、自然なことなのですからね。院はごりっぱな御風采ふうさいで、あの方の後宮に侍することができれば女として幸福至極だろうとは思いますが、盛りの過ぎた方だと今の御位置からは思われますからね。音楽だって、花だって、鳥だってその時その時に適したものでなければ魅力はありません。東宮はどうですか」

などと中将が言う。

「それはどうかね。初めからりっぱな方が上がっておいでになって、御寵愛ちようあいをもっぱらにしておいでになるのだから、それだけでも資格のない人があとではいつて行つては、苦痛なことばかり多いだろうと思うからね。お父様がほんとうにいてくだすつたら、この人たちの遠い未来まではわからないとしても、さしあたっては何の引け目もなしにどこへでもお出しになっただろうがね」

と尚侍ないしのかみが言いだしたために、めいった空氣に満ちてきたのもぜひないことである。

中将などが立つて行つたあとで、姫君たちは打ちさしておいた碁をまた打ちにかかった。昔から争っていた桜の木を賭けかにして、

「三度打つ中で、二度勝った人の桜にしましょう」

などと戯れに言い合っていた。

暗くなつたので勝負を縁側に近い所へ出てしていた。御簾みすを巻き上げて、双方の女房も固唾かたすをのんで碁盤の上を見守っている。ちょうどこの時にいつもの藏人少将は侍従の所へ来たのであつたが、侍従は兄たちといつしよに外へ出たあとであつたから、人氣ひとけも少なくて静かな邸やしきの中を少将は一人で歩いていたが、廊わたどの戸のあいた所が目について、静かにそこへ寄つて行つて、のぞいて見ると、向こうの座敷では姫君たちが碁の勝負をしていた。こんな所を見ることができたことは、仏の出現される前へ来合わせたと同じほどな幸福感を少将に与えた。夕明りも霞かすんだ日のことでさやかに物は見せないものであるが、つくづくとながめているうちに、桜の色を着たほうの人が恋しい姫君であることも見分けることができた。「散りなんのちの」という歌のように、のちの形見にも面影をしたいほど麗れい艶えな顔であつた。いよいよこの人をほかへやることが苦しく少将に思われた。若い女房たちの打ち解けた姿なども夕明りに皆美しく見えた。碁は右が勝った。

「高麗こまの乱らん 声しょう（競馬の時に右が勝てば奏される樂）がなぜ始まらないの」と得意になつて言う女房もある。

「右がひいきで西のお座敷のほうに寄つていた花を、今まで左方に貸してお置きあそばし

たきまりがつけましたのですね」

などと愉快そうに右方の者ははやしたてる。少将には何があるのかもよくわからないのであるが、その中へ混じっていつしよに遊びたい気のするものの、だれも見ないと信じている人たちの所へ出て行くことは無作法であろうと思つてそのまま歸つた。

もう一度だけあした機会にあえないであろうかと、少将はそののちも恋人の邸をうかがい歩いた。

姫君たちは毎日花争いに暮らしているのであつたが、風の荒く吹き出した日の夕方に梢から乱れて散る落花を、惜しく残念に思つて、負け方の姫君は、

桜ゆる風^ふに心の騒ぐかな思ひぐまなき花と見る見る

こんな歌を作つた。そのほうにいる宰相の君が、

咲くと見てかつは散りぬる花なれば負くるを深き怨^{うら}みともせず

と慰める。右の姫君、

風に散ることは世の常枝ながらうつろふ花をただにしも見じ

右の女房の大輔、

心ありて池の汀に落つる花泡となりてもわが方に寄れ

勝ったほうの童女が庭の花の下へ降りて行つて、花をたくさん集めて持つて来た。

大空の風に散れども桜花おのがものぞと掻き集めて見る

左の童女の馴君がそれに答えて、

「桜花匂ひあまたに散らさじとおほふばかりの袖はありやは

気が狭いというものですね」

などと悪く言う。

そんなことをしているうちにずんずん月日のたつていくことも妙齡の娘たちを持つている尚侍を心細がらせて、一人で姫君たちの将来のことばかりを考えていた。

院からは毎日のように御催促の消息をお送りになった。女御にようごからも、

私を他人のようにお思いになるのですか。院は、私が中ではばんでいるように憎んでおいでになりますから、それはお戯れではあつても、私としてつらいことですから、できませんならなるべく近いうちにそのことの実現されますように。

こんなふうに懇切に言つて来た。それが宿命であるために、こうまでお望みになるのであるから、御辞退するのはもつたいたないと尚侍は考えるようになった。手道具類は父の大臣がすでに十分の準備をしておいたのであるから、新しく作らせる必要もなくて、ただ女房の装束類その他の簡単な物だけを、娘の院参のために玉鬘夫人は用意していた。姫君の運命が決められたことを聞いて、蔵人少将は死ぬほど悲しんで、母の夫人にどうかしてほしいと責めた。夫人は困つて、

私の出てまいる問題でないことに私が触れますのも、盲目的な親の愛からでございます。この気持ちを御理解してくださいますならば、なんとか子供の心を慰むるようにお計らいくださいませんか。

などといったいたしく訴えて来たのを、尚侍は、

「気の毒で困ってしまうばかり」

と歎息たんそくをしながら、

どの道をとりますことが娘の幸福であるかもわからないのですが、院からの仰せがたびたびになるものですから、私は思い悩んでいます。御愛情をお持ちくださるなら、しばらくお忍びくだすって、慰安の方法を私が講じますのを待ってもらいますことが、世間体もよろしいかと思われます。

こんな返事を書いたのは、姉君の院参を済ませてから妹を与えたいという考えらしい。

同時にそれをするのも世間へ見せびらかすようなことにもなるし、少将の官をも少し進ませたからにしたほうがいいからと、こんなふうたまかずらに玉鬘夫人は思っているのであつたが、

男はこの望みどおりに妹の姫君へ恋を移すのは不可能に思っているのである。ほのかに顔を見てからは面影に立つほど恋しくて、どんな日にこの人をまた見ることができである

うかとかばかり歎なげいているのであったから、もう望みのないこととしてあきらめねばならぬことになったのを非常に悲しんだ。今さら何のかいもあることではなくても、なお自分の気持ちだけは通じておきたいと思つて、少将が侍従の部屋へやへ訪ねて行くと、その時侍従は源侍従から来た手紙を読んでいたのであつて、隠してしまおうとするのを、少将は奪い取つてしまった。秘密があるように思われたくもないと思つて、侍従はしいて取り返そうとはしなかつた。それは表面にそのことは言わずに、ただなんとなく人生が暗くなつたというようなことばかりの書かれた手紙であつた。

つれなくて過ぐる月日を数へつつ物怨うらめしき春の暮れかな

ともある。こんなふうには、余裕のある恨み方をするだけで足りている人もある。自分があまりに無我夢中になつて恋にあせることが一つはこの家の人に好感を与えなかつたのであろうと、少将はこんなことを思つてさえも胸の痛くなるのを覚えるために、あまり侍従とも話をせずに、親しくする女房の中將の君の部屋のほうへ歩いて行きながらも、これもむだなことに違ひないと歎息ばかりをしていた。侍従が源侍従へ書く返事の相談をするた

めに、母の所へ出て行くのを見ても少将は腹がたつのであった。若い人であるから失恋の悲しみに落ちては救われようもなくなつたようにばかり思うのだつた。

見苦しいほどにも恨めしがり、悲しがつて言い続ける少将の相手になつている中將の君は、いたましく思つて返辞もあまりできないのであつた。暮の勝負のあつた夕方に隙見^{すきみ}をしたことも少将は言いだして、

「せめてあの瞬間の楽しさだけでも、もう一度経験したい。何を目的にして今後私は生きて行くでしょう。けれど先はもう短い氣のする私ですよ。無情も情けであるというように、死んでしまえるならかえつてこれがよかつたかもしれませんね」

まじめにこんなことを言うのである。同情はしていても、何とも慰める言葉のないことではないかと中將の君は思ふのであつた。夫人が姉君に代えて二女を許そうとしていることが少しもうれしいふうでないのは、あの桜の夕べにあげ放された座敷までことごとくこの人は見ることができたために、こうした病的なまでの恋を一人の姫君に寄せるようになったのであらうと思うと、道理にも思えた。

「姫君がお聞きになりましたら、いっそうけしからん考えを持つておいでになるとお思ひになつて、御同情が減るでしょう。私のお氣の毒に思つておりました氣持ちも、もうなく

なりましたよ。むちやなことばかりお言いになるから」

正面から中將が攻撃すると、

「そんなことはかまわない。人は死ぬ時になると何もこわいものはありませんよ。それにしても碁の勝負にお負けになったのは気の毒だった。私を寛大にお扱いくださって、あの時目くばせをしてそばへ呼んでくださったら、よい助言ができたのに、勝たせてあげたのに」

などと言つて、また、

いでやなぞ数ならぬ身にかなはぬは人に負けじの心なりけり

とも歌った。中將の君が笑いながら、

わりなしや強きによらん勝ち負けを心一つにいか任する

と言う態度までも、冷淡に思われる少將であつた。

哀れとて手を許せかし生き死にを君に任するわが身とならば

冗談じょうだんを混ぜては笑いもし、また泣きもして少将は夜通し中將の君の局つぼねから去らなかつた。

翌日はもう四月になっていた。兄弟たちは季の変わり目で皆御所へまいるのであつたが、少将一人はめいりこんで物思ひを続けているのを、母の夫人は涙ぐんで見ていた。大臣も、「院の御感情を害してはならないし、自分がそうした問題に携わるのもいかがと思つたので、せつかく正月に逢あつていながら何も言いださなかつたのは間違ひだった。私の口からぜひと懇望すれば同意の得られないことはなかつたろうにと思われるのに」などと言つていた。この日もいつものように、少将からは、

花を見て春は暮らしつ今日けふよりや繁しげきなげきの下に惑はん

という歌が恋人へ送られた。姫君の居間で高級な女房たちだけで、失望した求婚者たち

のいたましいことが言い並べられている時に、中将の君が、

「生き死にを君に任すとお言いになりました時には、それを言葉だけのことは思われなかつたのですから気の毒でございましたよ」

と言っているのを、尚侍は哀れに聞いていた。大臣やその夫人に対する義理と思つて、なお娘を忘れぬ志があるなら、その時には誠意の見せ方があると、妹君をそれにあてて玉たままかすら

鬘

夫人は思っているのである。しかし院参を阻止しようとするような態度はきわめて

不愉快であるとしていた。どれほどりっぱな人であっても、普通人には絶対に与えられぬと父である関白も思っていた娘なのであるから、院参をさせることすら未来の光明のない点で尚ないしのかみ侍は寂しく思っていたところへ、少将のこの手紙が来て女房たちはあわれがつていた。中将の君の返事、

今日ぞ知る空をながむるけしきにて花に心を移しけりとも

「まあお気の毒な、ただ言葉の遊戲にしてしまうことになるではありませんか」
などと横から言う人もあつたが、中将の君はうるさがって書き変えなかつた。

四月の九日に尚侍の長女は院の後宮へはいることになった。右大臣は車とか、前驅をずる人たちとかを数多くつかわした。雲井くもいの雁夫人かりは姉の尚侍をうらめしくは思っているが、今まではそれほど親密に手紙も書きかわさなかったのに、あの問題があつて、たびたび書いて送ることになったのに、それきりまたうとくなくなつてしまふのもよろしくないと思つて、纏頭でんとう用として女の衣裳いしやうを幾組みも贈つた。

気の抜けたようになっております人を介抱いたしますのかかつておりまして、私はまだ何も知らなかったのですが、知らせてくださいませんことは、うとうとしいあそばされ方だとお怨みうらみいたします。

という手紙が添つていた。おおように言いながらも恨みのほめかせてあるのを尚侍は哀れに思つた。大臣からも手紙が送られた。

私も上がろうと思つていたのですが、あやにく謹慎日にあたるものですから失礼いたします。息子たちはどんな御用にでもお心安くお使いください。

と言つて、源少将、兵衛佐ひやうえのすけなどをつかわした。

「御親切は十分ある方だ」

と言つて玉鬘たまかざら夫人は喜んでいた。弟の大納言の所からも女房用にする車をよこした。

この人の夫人は故関白の長女でもあったから、どちらからいっても親密でなければならぬのであるが、実際はそうでもなかった。藤中納言は自身で来て、異腹の弟の中将や弁の公達きんたちといつしよになり、今日の世話に立ち働いていた。父の関白がいたならばと、何につけてもこの人たちは思われるのであった。蔵人少将は例のように綿々と恨みを書いて、もう生ききれなく見えます命のさすがに悲しい私を、哀れに思うとただ一言でも言ってく下さいましたら、それが力になってしばらくはなお命を保つこともできるでしょう。

などとも言つてあるのを、中将の君が持つて行つた時に、居間では二人の姫君が別れることを悲しんでめいつたふうになっていた。夜も昼もたいていいつしよにいた二人で、居間と居間の間に戸があつて西東になつてゐることをすら飽き足らぬことに思つて、双方どちらかが一人の居間へ行つていたような姉きょうだい妹が、別れ別れになるのを悲観しているのである。ことに美しく化粧がされ、晴れ着をつけさせられている姫君は非常に美しかった。父が天子の後宮の第一人にも擬していた自分であつたがと、そんなことを思い出して、寂しい気持ちに姫君がなつていた時であつたから、少将の手紙も手に取つて読んでみた。りっぱに父もあり母もそろつてゐる家の子でいて、なぜこうした感情の節制もない手紙を書くのであろうと姫君はいぶかりながらも、それかぎりであきらめようと書かれてあるの

を、真実のことかとも思つて、少将の手紙の端のほうへ、

哀れてふ常ならぬ世の一言もいかなる人に掛くるものぞは

生死の問題についてだけほのかにその感じもいたします。

とだけ書いて、

「こう言つてあげたらどう」

と姫君が言つたのを、中将の君はそのまま蔵くらうど人少将へ送つてやった。

珍しい獲物のようにこれが非常にうれしかったにつけても、今日が何の日であるかと思うと、また少将の涙はとめどもなく流れた。またすぐに、「恋ひ死なばたが名は立たん」などと恨めしそうなことを書いて、

生ける世の死には心に任せねば聞かでややまん君が一言

塚つかの上にもでも哀れをかけてくださるあなただと思ふことができたら、すぐにも死に

たくなるでしょうが。

こんなことも二度めの手紙にあるのを読んで、姫君はせねばよい返事をしたのが残念だ、あのまま送ってやったらしいと苦しく思つて、もうものも言わなくなった。

院へ従つて行く女房も童女もきれいな人ばかりが選ばれた。儀式は御所へ女御にようごの上がる時と変わらないものであつた。尚侍はまず女御のほうへ行つて話などをした。新女御は夜が更ふけてからお宿直とのいに上がつて行つたのである。后きさきの宮も女御たちも、もう皆長く侍しておられる人たちばかりで、若い人といつてはない所へ、花のような美しい新女御が上がつたのであるから、院の御寵愛がこれに集まらぬわけではない。たいへんなお覚えであつた。上みくらひない御位におわしました当時とは違つて、唯ただひと人のようにしておいでになる院の御姿は、より美しく、より光る御顔と見えた。尚侍が当分娘に添つて院にとどまつていることであろうと、院は御期待あそばされたのであるが、早く帰つてしまったのを残念おぼしに思召めし、恨めしくも思召した。

院は源侍従を始終おそばへお置きになつて愛しておいでになるのであつて、昔の光源氏みかどが帝の御寵児であつたところと同じように幸福に見えた。院の中では后の宮のほうへも、女に一よいちの宮の御母女御のほうへもこの人は皆心安く出入りしているのである。新女御にも敬

意を表しに行くことをしながら、心のうちでは、失敗した求婚者をどう見ているかと知りたく思っていた。

ある夕方のしめやかな気のある時に、薫の侍従は藤侍従とつれ立って院のお庭を歩いていたが、新女御の住居に近い所の五葉の木に藤が美しくかかって咲いているのを、水のそばの石に、苔を敷き物に代えて二人は腰をかけてながめていた。露骨には言わないのであるが、失恋の気持ちをそれとなく薫は友にもらすのであった。

手にかくるものにしあらば藤の花松よりまさる色を見ましや

と言つて、花を見上げた薫の様子が身に沁んで気の毒に思われた藤侍従は、自身は無力で友のために尽くすことができなかつたということをほのめかして薫をなだめていた。

紫の色は通へど藤の花心にえこそ任せざりけれ

まじめな性質の人であつたから深く同情をしていた。薫は失恋にそれほど苦しみもして

いながったが残念ではあつた。

蔵人少将はどうすればよいかも自身でわからぬほど失戀の苦に悩んで、自殺もしかねまじい気色に見えた。求婚者だった人の中では目標を二女に移すのもあつた。蔵人少将を母夫人への義理で二女の婿にもと思い、かつて尚侍はほめかしたこともあつたが、あの時以後もう少将はこの家を訪ねることをしなくなった。院へは右大臣家の子息たちが以前から親しくまいつているのであつたが、蔵人少将は新女御のまいつて以来あまり伺候することがなくて、まれまれに殿上の詰め所へ顔を出してもその人はすぐに逃げるようにして歸つた。

帝は、故人の関白の意志は姫君を入内させることであつて、院へ奉ることではなかつたのを、遺族のとつた処置は腑に落ちぬことに思召して、中將をお呼びになつてお尋ねがあつた。

「天機よろしくはありませんでした。ですから世間の人も心の中でまずいことに思うことだと私が申し上げたのに、お母様は、信じるところがおありにでもなるように院参のほうへおきめになったものですから、私らが意見を異にしているようなことは言われなかつたのです。ああしたお言葉をお上からいただくようでは私の前途も悲観されます」

中将は不愉快げに母を責めるのだった。

「何も私がそうでなければならぬときめたことではなく、ずいぶん躊躇ちゆうちよをしたことなのだがね。お気の毒に存じ上げるほどぜひにと院の陛下が御懇望あそばすのなもの、後援者のない人は宮中にはいつてからのみじめさを思つて、はげしい競争などはもうだれもなさらないような院の後宮へ奉つたのですよ。だれも皆よくないことであれば忠告をしてくれればいいのだけれど、その時は黙つていて、今になると右大臣さんなども私の処置が悪かつたように、それとなくおつしやるのだから苦しくなりませんよ。皆宿命なのですよ」と穏やかに尚侍は言つていた。心も格別騒いではないのである。

「その前生の因縁というものは、目に見えないものですから、お上がああ仰せられる時に、あの妹は前生からの約束がありましてなどという弁解は申し上げられないではありませんか。中宮ちゆうぐうがいらつしやるからと御遠慮をなすつても、院の御所には叔母おば様の女御さんがおいでになつたではありませんか。世話をしてやろうとか、何とか、言つていらつしやつて御了解があるようでも、いつまでそれが続くことですかね、私は見てまいしょう。御所には中宮がおいでになるからつて、後宮がほかにだれも侍していないでしようか。君に仕えたてまつることでは義理とか遠慮とかをだれも超越してしまうことができると言つて、

宮仕えをおもしろいものに昔から言うのではありませんか。院の女御が感情を害されるようなことが起こってきて、世間でいろんな噂うわさをされるようになれば、初めからこちらのしたことが間違いだつたとだれにも思われるでしょう」

などとも中將は言つた。兄弟がまたいつしよになつても非難するのを玉鬘たまかづら夫人は苦しく思つた。

その新女御を院が御寵愛ちようあいあそばすことは月日とともに深くなつた。七月からは妊娠をした。悪阻つわりに悩んでいる新女御の姿もまた美しい。世の中の男が騒いだのはもつともである、これほどの人を話だけでも無関心で聞いておられるわけではないのであると思われた。御愛姫あいぎを慰めようと思召して、音楽の遊びをその御殿でおさせになることが多くて、院は源侍従をも近くへお招きになるので、その人の琴の音ねなどを薫は聞くことができた。この侍従が正月に「梅が枝」を歌いながら訪ねて行つた時に、合わせて和琴を弾ひいた中將の君も常にそのお役を命ぜられていた。薫は弾き手のだれであるかを音に知つて、その夜の追想が引き出されもした。

翌年の正月には男踏歌おとことうかがあつた。殿上の若い役人の中で音楽のたしなみのある人は多かつたが、その中でもすぐれた者としての選にはいつて薫の侍従は右の歌手の頭とうになつた。

あの蔵人^{くらうど}少将は奏樂者の中にはいつていた。初春の十四日の明るい月夜に、踏歌の人たちは御所と冷泉院^{れいぜい}へまいった。叔母^{おぼ}の女御も新女御も見物席を賜わつて見物した。親王がた、高官たちも同時に院へ伺候した。源右大臣と、その舅家^{きゆうけ}の太政大臣の二系統の人们以外にはなやかなきれいな人はないように見える夜である。宮中で行なつた時よりも、院の御所の踏歌を晴れがましいことに思つて、人々は細心な用意を見せて舞つた。また奏し合つた中でも蔵人少将は、新女御が見ておられるであらうと思つて興奮をおさえることができないのである。美しい物でもないこの夜の綿の花も、挿頭^{かざ}す若公^{きんたち}達に引き立てられて見えた。姿も声も皆よかつた。「竹河」を歌つて階^{きやうはし}のもとへ歩み寄る時、少将の心にもまた去年の一月の夜の記憶がよみがえつてきたために、粗相も起こしかねないほどの衝動を受けて涙ぐんでいた。后^{きうぎ}の宮の御前で踏歌がさらにあるため、院もまたそちらへおいでになつて御覧になるのであつた。深更になるにしたがつて澄み渡つた月は昼より明るく照らすので、御簾^{みす}の中からどう見られているかということに上氣して、少将は院のお庭を歩くのでなく漂つて行く気持ちでまいった。杯を受けて飲むことが少ないと言つて、自身一人が責められることになるのも恥ずかしかつた。

踏歌の人たちは夜通しあちらこちらとまわつたために翌日は疲労して寝ていた。薫侍従

に院からのお召があつた。

「苦しいことだ。しばらく休養したいのに」

と言いながら伺候した。御所で踏歌を御覧になつた様子などを院はお尋ねになるのであつた。

「歌頭^{かとう}は今まで年長者がするものなのだが、それに選ばれるほど認められているのだと思つて満足した」

と仰せられてかわいく思召す御さまである。「万^{ばん}春^{しゅん}楽^{らく}」（踏歌の地に弾^ひく曲）の譜をお口にあそびしながら新女御の御殿へおいでになる院のお供を薫^{かほ}はした。前夜の見物に自邸のほうから来ていた人たちが多くて、平生よりも御簾の中のはいはがはなやかに感ぜられるのである。渡^{わた}殿^{どの}の口の所にしばらく薫はいて、声になじみのある女房らと話などをしていた。

「昨夜の月はあまりに明るくて困りましたよ。蔵人少将が輝くように見えましたね。御所のほうではそうでもありませんでした」

などと言う薫の言葉を聞いて、心に哀れを覚えている女房もあつた。

「夜のことでよくわかりませんでした、あなたがだれよりもごりっぱだったということ

は一致した評でございました」

などと口上^{じょうず}手^てなことも言つて、また中から、

竹河のその夜のことは思ひいづや忍ぶばかりの節^{ふし}はなけれど

だれかの言つたこの歌に、薫は涙ぐまれたことで、自分の心にも深くしみついている恋であることがわかつた。

流れての頼みむなしき竹河に世はうきものと思ひ知りにき

と答えて、物思いのふうの見えるのを女房たちはおかしがった。その人たちも薫は蔵人少将などのように露骨に恋は告げなかつたが、心の中に思いを作っていたのであろうと憐^{あわれ}んではいたのである。

「少しよけいなことまでも言つたようですが、他言をなさいませんように」
と言つて、薫が立つて行こうとする時に、

「こちらへ来るように」

と、院の仰せが伝えられたので、晴れがましく思いながら新女御の座敷のほうへ薫はまいった。

「以前六条院で踏歌の翌朝に、婦人がたばかりの音楽の遊びがあったそうで、おもしろかったと右大臣が言っていた。何から言っても六条院がその周囲へお集めになったほどのすぐれた人が今は少なくなつたようだ。音楽のよくできる婦人などもたくさん集まっていたのだからおもしろいことが多かつたであろう」

などと、その時代を御追想になる院は、楽器の用意をおさせになつて、新女御には十三絃^{げん}、薫には琵琶^{びわ}をお与えになつた。御自身は和琴をお弾^ひきになりながら「この殿」などをお歌いあそばされた。新女御の琴は未熟らしい話もあつたのであるが、今では傷のない芸にお手ずからお仕込みになつたのである。はなやかできれいな音を出すことができ、歌もの、曲ものも上手^{じょうず}に弾いた。何にもすぐれた素質を持つているらしい、容貌^{ようぼう}も必ず美しいであろうと薫は心の惹^ひかれるのを覚えた。こんなことがよくあつて、新女御と薫の侍従は親しくなつていた。反感を引くようにまでは怨^{うら}みかけたりはしなかったが、何かのおりには失恋^{なげ}の歎^{なげ}きをかすめて言う薫を、女御のほうではどう思つたか知らない。

四月に院の第二皇女がお生まれになった。きわめてはなやかなことの現われてきたのではないが、院のお心持ちを尊重して、右大臣を初めとして産養うぶやしなひを奉る人が多かった。尚侍はお抱きした手から離せぬようにお愛し申し上げていたが、院から早くまいるようにという御催促がしきりにあるので、五十日目ぐらいに、新女御は宮をおつれ申して院へまいった。院はただお一人の内親王のほかには御子を持たせられなかったのであるから、珍しく美しい少皇女をお得になったことで非常な御満足をあそばされた。

以前よりもいっそう御寵愛ちようあいがまさって、院のこの御殿においになることの多くなつたのを、叔母おばの女御付きの女房たちなどは、こんな目にあわないうではならなかつたらうかなどと思つてねたんだ。叔母と姪めいとの二人の女御にようの間には嫉妬しつとも憎しみも見えないのであるが、双方の女房の中には争いを起こす者があつたりして、中將が母に言つたことは、兄の直覺で真実を予言したものであつたと思われた。尚侍ななしのかみも、こんな問題が続いて起こる果てはどうなることであろう、娘の立場が不利になつていくのは疑いないことである、院の御愛情は保てても、長く侍しておられる人たちから、不快な存在のように新女御が見られることになつては見苦しいと思つていた。

みかど
帝も院へ姫君を奉つたことで御不快がつておいでになり、たびたびその仰せがあるとい

うことを告げる人があつたために、尚侍は申しわけなく思つて、二女を公式の女官にして宮中へ差し上げることにきめて、自身の尚侍の職を譲つた。尚侍の辞任と新任命は官で重大なこととして取り扱われるのであつたから、ずっと以前から玉鬘たまかざらには辞意があつたのに許されなかつたところへ、娘へ譲りたいと申し出たのを、帝は御伯父おじであつた大臣の功勞を思召す御心みこころから、古い昔に例のあつたことをお思いになつて、大臣の未亡人の願いをお納いれになり、故太政大臣の女じよは新尚侍に任命された。これはこの人に定められてあつた運命で、母の夫人の単独に辭職を申し出た時にはお許しがなかつたのであらうと思われた。眞実は後宮であつて、尚侍の動かない地位だけは得ているのであるから、競争者の中に立つようなこともなくて、氣樂くもいに宮中におられることとして玉鬘夫人は安心したのであるが、少將のことを雲井くもいの雁夫人かりから再度申し込んで來た以前のことに対して、自分はそれに代える優遇法を考えていると言つたのであつたがどう思つているであらうと、そのことだけを氣の済まぬことに思つた。二男の弁を使いにして玉鬘夫人は右大臣へ隔てのない相談をすることにした。宮中からかういふ仰せがあるということを言つて、

「娘を宮仕えにばかり出したがると世間で言われるようなことがないかと、そんなことを私は心配しております」

と伝えさせると、

「お上^{かみ}が不愉快に思召すのがお道理であるように私も承っております。それに公職におつきになったのですから、その点でも宮中に出仕しないのは間違いです。早くお上げになるほうがいいと思います」

という言葉で大臣は答えて来た。院の女御の場合のように、中宮の御了解を得ることに努めてから、玉鬘は二女を御所へ奉った。良人^{おとこ}の大臣が生きておれば、わが子は肩身狭くかくしてまでの宮仕えはせずともよかつたはずであると夫人は物哀れな気持ちをもた得たのであった。姉君は有名な美人であることを帝もお知りあそばされていたのであったが、その人でない妹のまいったことで御満足はあそばされないようであったが、この人も洗練された貴女のふうのある人であった。前尚侍はこれが終わってのち尼になる考えを持っていたが、

「あちらもこちらもお世話になさるなければならぬことが多いのですから、今日ではまだ仏勤めをなさいますのに十分の時間がなくて、尼におなりになったかきもなくなるでしょう。もうしばらくの間そのままで、どちらの姫君のことも、これで安心というところまで見きわめになつてから、専念に道をお求めになるほうがいい」

と子息たちが言うので、そのことも停滞した形であった。

御所の娘のほうへは時々夫人が出かけて行つて、二、三日とどまって世話をやいていもするのであつたが、昔をお忘れきりにならぬお心見える院の御所のほうへは、まいらねばならぬことがあつても夫人は行かないのであつた。迷惑しながら、もったいなく心苦しく存じ上げた昔があるために、だれの反対をも無視して長女を院へ差し上げたが、自分の上にまで仮にもせよ浮いた名の伝えられることになつては、これほど恥ずかしいことはないのであるからと夫人は思つていても、そのことは新女御に言われぬことであつたから、自分を昔から父は特別なもののように愛してくれて、母は桜の争いの時を初めとして、何によらず妹の肩を持つほうであつたから、こんなふうに愛の厚薄をお見せになるのであると長女は恨めしがつていた。昔にかかわるお恨めしさのほうが深い院も、女御に御同情あそばして、母夫人を冷淡であると言つておいでになつた。

「過去の人間の所へよこされたあなたが軽蔑けいべつされるのももつともだ」

などと仰せになつて、そんなことによつてもますますこの人をお愛しになつた。

次の年にはまた新女御が院の皇子をお生みした。院の多くの後宮の人たちにそうしたことは絶えてなかつたのであるから、この宿命の現われに世人も驚かされた。院はまして限

りもなく珍しく思召おもほしめしてこの若宮をお愛しになった。在位の時であつたなら、どれほどこの宮の地位を光彩あるものになしえたかもしれぬ、もう今では過去へ退いた自分から生まれた一親王にこの宮はすぎないのが残念であるとも院は思召した。女一にょいちの宮みやを唯一の御子としてお愛しになった院が、こんなふうに新しい皇子、皇女の父におなりあそばされたことも、かねて思いがけぬことであつた中にも、はじめてお得になった男宮をことさら院の御珍重あそばすようになったことで、女一の宮の母女御も、こんなにまで専せん寵ちようの人をおつくりにならないでもいいはずであると、院をお恨み申し上げるようになり、新女御をねたむようにもなった。そうなつてから新女御の立場はますます苦しくなり、双方の女房の間に苦い空気がかもされてゆけば、自然二人の女御の交情も隔たつてゆく。世間のこととしても、人の新しい愛人に対するよりも、古い妻に同情は多く寄るものであるから、院に奉仕する上下の役人たちも、貴い御地位とうとにあらせられる後の宮、女一の宮の女御のほうに正しい道理のあるように見て、新女御のことは反感を持つて何かと言ひ歩くというような状態になつたのを、兄の公達こうだつらも、夫人に、

「だから私たちの申したことは間違つていなかったでしょう」

と言つて責めた。夫人もまた世間の噂うわさと院の御所の空氣に苦勞ばかりがされて、

「かわいそうな女御さんほどに苦しまないでも幸福をやすやすと得ている人は世間に多いのだろうがね。条件のそろった幸運に恵まれている人でなければ宮仕えを考えてはならないことだよ」

と歎息たんそくしていた。以前の求婚者で、順当に出世ができ、婿君であつても恥ずかしく思われない人が幾人もあつた。その中でも源侍従と言われた最も若かつた公子は参議中将になつていて、今では「匂いにおの人」「薫かおる人」と世間で騒ぐ一人になつていた。重々しく落ち着いた人格で、尊い親王がた、大臣家から令嬢との縁談を申し込まれても承知しないという取り沙汰ざたを聞いても、

「以前はまだまだよりない若い方だつたが、りっぱになつてゆかれるらしい」

玉鬘たまかざら 夫人は寂しそうに言つていた。

蔵人くらうどの少将だつた人も三位の中將とか言われて、もう相当な勢いを持つていた。

「あの方は風采ふうさいだつておよろしかったではありませんか」

などと言つて、少し蓮葉はすはな性質の女房らは、

「今のうるさい御境遇よりはそのほうがよかつたのですね」

とささやいたりしていた。しかし今も玉鬘夫人の長女に好意を持つ者があつた。この三

位中將は初恋を忘れることができず、悲しくも、恨めしくも思つて、左大臣家の令嬢と結婚をしたのであるが、妻に対する愛情が起こらないで「道のはてなる常陸帯」(かごとばかりも逢はんとぞ思ふ)などと、もう翌日はむだ書きに書いていたのは、まだ何を空想しているのかわからない。院の新女御は人事関係の面倒さに自邸へ下がっていることが多くなつた。母の夫人は娘のために描いた夢が破れてしまったことを残念がつていた。御所へ上がったほうの姫君はかえつてはなやかに幸福な日を送つていて、世間からも聡明で趣味の高い後宮の人と認められていた。

左大臣が薨なくなつたので、右が左に移つて、按察使大納言で左大將にもなつていた玉鬘夫人の弟が右大臣に上つた。それ以下の高官たちにも異動が及んで、薫中將は中納言になり、三位の中將は参議になつた。幸運な人は前にも言つた二つの系統のほかに見られない時代と思われた。源中納言は礼まわりに前尚侍の所へ来て、庭で拝礼をした。夫人は客を前に迎えて、

「こんなあばら家やになつていきます家を、お通り過ぎにならず、お寄りくださいます御好意を拝見いたしましたも、六条院の皆御恩だと昔が思われてなりません」

などと言つてゐる声に愛嬌あいきようがあつて、はなやかに美しい顔も想像されるのであつた。

こんなふうでいられるから、院の陛下は今もこの人がお忘れになれないのであるとそのうち一つの事件をお引き起こしになる可能性もあることを薫は感じた。

「陞任しょうにんをたいした喜びとは思っておりませんが、この場合の御挨拶あいさつにはどこよりも先にとお上りになったのです。通り過ぎるなどというお言葉は平生の怠慢をおしかりになつておっしゃることですか」

新中納言はこう言うのであつた。

「今日のようなおめでたい日に老人の繰り言などはお聞かせすべきでないと御遠慮はされますが、ただの日にお訪ねたずくださるお暇はおありにならないのですし、手紙に書いてあげますほどの筋道のあることではないのですから、聞いてくださいませ。院に侍しております人がね、苦しい立場に置かれてまして煩悶はんもんをばかりしておりますね。はじめは女一の宮の女御さんを力のように思っていましたし、後の宮様も六条院の御関係で御寛大に御覧くださるだろうと考えていたことですが、今日はどちらも無礼な闖入者ちんにゅうしゃとしてお憎みあそばさうでしてね。困りましてね。宮様がただは院へお置き申して、存在を皆様にきらわれる人だけを、せめて家で気楽うちに暮らすようにと思ひまして帰らせたのですが、それがまた悪評の種を蒔くまことになつたらしゅうございます。院も御機嫌きげんを悪くあそばした

ようなお手紙をくださいますのですよ。機会がありましたら、あなたからこちらの気持ち
をほのめかしてお取りなしくださいます。離れようのない関係を双方にお持ちしているの
ですから、お上げしました初めは、どちらからも御好意を持っていただけるものと頼みに
したのですが、結果はこれでございますもの、私の考えが幼稚であつたことばかりを後
悔いたしております」

玉たま鬘かずら 夫人は歎息たんそくをしていた。

「そんなにまで御心配をなさることではないと思います。昔から後宮の人というものは皆
そうしたものになっているのですからね、ただ今では御位みくらいをお去りになって無事閑散な
御境遇でも、後宮にだけは平和の来ることではないのですから、第三者が見れば君くん 寵ちように
変わりはないと見えることもその人自身にとつては些細ささいな差が生じるだけでも恨めしくな
るものらしいですよ。つまらぬことに感情を動かすのが女御后にようぎぎきの通弊ですよ。それくらい
の故障もないとお思いになつて宮廷へお上げになつたのですか。御認識不足だったのです
ね。ものを気におかけにならないで冷静にながめていらつしやればいいのです。男が出て
奏上するような問題ではありませんよ」

と遠慮なく薫が言うと、

「お逢^あいしたら聞いていただこうと思つて、あなたをお待ちばかりしてしまいましたのに、私をおたしなめにばかりなるそのあなたの理窟^{りくつ}も、私は表面しか御覧にならない理窟^{りくつ}だと思いますよ」

こう言つて玉鬘夫人は笑つていた。人の母らしく子のために気をもむらしい様子ではあるが、態度はいたつて若々しく娘らしかった。新女御もこんな人なのであらう、宇治の姫君に心の惹^ひかれるのも、こうした感じよさをその人も持つてゐるからであると源中納言は思つていた。

若い尚^{ないしのかみ}侍もこのごろは御所から歸つて來ていた。そちらもあちらも姫君時代よりも全体の様子の重々しくなつた、若い閑暇^{ひま}の多い婦人の居所になつてゐることが思われ、御簾^すの中の目を晴れがましく覚えながらも、静かな落ち着きを見せてゐる薫を、夫人は媚にしておいたならと思つて見ていた。

新右大臣の家はすぐ東隣であつた。大臣の任官披露^{ひろう}の大饗^{きやう}宴^{えん}に招かれた公達^{きんだち}などがそこにはおおぜい集まつていた。兵部卿^{ひやうぶきやう}の宮は左大臣家の賭弓^{のりゆみ}の二次会、相撲の時の宴会などには出席されたことを思つて、第一の貴賓として右大臣は御招待申し上げたのであつたが、おいでにならなかつた。大臣は秘藏にしている二女のためにこの宮を婿に

擬してゐるらしいのであるが、どうしたことか宮は御冷淡であつた。来賓の中で源中納言の以前よりもいっそうりっぱな青年高官と見える欠点のない容姿に右大臣もその夫人も目をとめた。

饗宴の張られる隣のにぎやかな物の氣配^{けはい}、行きちがう車の音、先払いの声々にも昔のことが思い出されて、故太政大臣家の人たちは物哀れな気持ちになつていた。

「兵部卿の宮がお薨^{かく}れになつて間もなく、今度の右大臣が通い始めたのを、輕^{けい} 佻^{ちよう}なことのように人は非難したものだけれど、愛情が長く変わらず夫婦にまでなつたのは、一面から見て感心な人たちと言つていい。だから世の中のことは何を最上の幸福の道とはきめて言えないのだね」

などと 玉^{たま} 鬘^{まかずら} 夫人は言つていた。

左大臣の息子の参議中將が隣に 大^{だい} 饗^{きやう} のあつた翌日の夕方ごろにこの家へ訪^{たず}ねて來た。院の女御が家に歸つてゐることदैいっそう美しく見える身の作りもして來たのである。

「よい役人にしていただきましたことなどは何とも思われません。心に願つたことのない悲しみは月がたてばたつほど積つていつてどうしようありません」

と言ひながら涙をぬぐう様子でややわぎとらしい。二十七、八で、盛りの美貌^{びぼう}を持つは

なやかな人である。

帰ったあとで、

「困った公達きんだちだね。何でも思いのままになるものと見ていて、官位の問題などは念頭に置いていないようだね。こちらの大臣がお薨かくれにならなければ、この若い人たちもあの人ら並みに、恋愛の遊戯を夢中になつてしただらうにね」

と言つて、玉鬘夫人は歎息たんそくをしていた。右兵衛督うひょうえのかみ、右大弁で参議にならないため太政官の政務に携わらないのを夫人は愁うれわしがつていた。侍従と言われていた末子は頭中とうちゅう将になつていた。年齢からいつてだれも官等の陞進しょうしんがおそいほうではないのであるが、人におくれると言つて歎なげいている。参議の職はいかにも若い高官らしく、ぐあいがいいのだけだ。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日41版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

竹河

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>